

運動の心地よさを味わわせ、学び合う中で技能をのばす体育・保健体育学習

1 体育・保健体育科で願う豊かな学びの姿

本学校園体育・保健体育科では「運動の心地よさを味わわせ、表現する力をのばす体育・保健体育学習」をテーマに一貫した体育・保健体育学習の研究を行ってきた。その中で子どもたちの豊かな学びの姿として次のような姿を求めている。

- 挑戦する意欲をもっている姿（意欲、耐性）
- 体を動かしたくなる、動く気持ちいいと感じている姿(情緒)
- 身体を動かしている姿（技能・体力）
- 運動を習慣的に行っている姿（活用）
- 技能構造を追求し、考えている姿（思考・知識）
- 仲間とかかわっている姿（協力）
- 自分や仲間の姿を観察し、思ったことを言葉や身体をつかって説明している姿（思考・判断・表現）

学び合いを通してこのような子どもたちの姿を追い求めながら、技能の向上をめざしている。そのような子どもの姿を追い求める授業の中で、これまで子どもたちから次のようなふりかえりが出された。

チームのみんなが足の向きのことを言ってくれました。だから、今日は「つまさき見てて。」と言いました。そうすると投げた後で、Aくんが「カキーン（ボールをバットで打つ）のときみたいにかうやってやるといいよ。」とつま先の手本を見せてくれたり、Bちゃんが「今、できてたよ！」と言ってくれたりしました。ちょっと投げにくかったけど、記録は3ポイント伸びていました。びっくり！私もみんなにアドバイスするぞー！オー！（小学4年児童）

ペアになってアドバイスをし合いました。自分では気づいていなかったことに気づかせてもらいました。例えば、振り上げ足の高さが低くていいことや、踏み切りの位置がちょうどいいことなどです。逆にアドバイスしたことを自分にも取り入れてやっていきたいです。（抜き足を地面と平行にするといいことや1台目までのスピードをもっと上げること）(中学1年生徒)

小学4年「ボールランドのポイントゲッターになろう」では、ボールを打ったり投げたりする際、肘や足がどのように動いているのか観察した。前の学習で見つけたコツをもとに、実際に動きを仲間に見せながら互いにアドバイスをしたり、できていることを認めたりしている。中学1年「ハードル走」では、ペアで見合うことにより、お互いの動きを指摘し合い、見えなかった自分の姿をイメージしている。そこから、自分の課題に向かって、身体の動かし方を調整し、よりよくしていこうとしている。

体育における学習場面には、自分の運動している姿が見えづらく、動きのイメージがわきにくい状況がある。したがって、仲間から自分の動きを見られ、指摘されることは、自らの課題を見つけ、それを解決していくことにつながっていく。言葉や動きなど、自分なりの表現方法で伝え合うことで、思考が深まり、「○○するとよさそうだ」、「○○してみよう」と判断し、コツを意識しながら練習をすることで、さらなる技能の向上がみられると考える。

2 昨年度までの研究の経緯

(1) 体育・保健体育科における思考力・判断力・表現力

これからの体育学習において認識学習が重視されている。運動領域での認識学習は「できる」につながる「わかる」を生み出すものであると考える。その基盤として「やってみたい」とい

う思いが必要となる。その思いは、場の設定が工夫された教材との出会いや、仲間との豊かな交流によって引き出されることが多い。課題は何なのか、どうしたらうまくできそうか、動きを見合い、話し合う中で学習内容の核心である課題解決にむかっての仲間との交流が促される。その交流の積み重ねを通してひとりができることが、みんなができることへ発展していく。

子どもたちの「やってみたい」という追求の心は本来備わっている欲求の一つであり、この気持ちこそが課題を解決するために考えようとする力、まさに「思考力・判断力」であり、「できる・わかる」ために最も大切であることが昨年度までの研究において実証された。その時に生じる「思いや考え（今までの遊びや生活、学習経験をもとに、自分や仲間の課題、そしてその解決方法）」を他者に伝える（表現力）ことで互いに高め合い分かり合える喜びを感じ、「やってみたい」という思いを強め、次への意欲へとつながっていく。

動ける身体の基盤の上に「やってみたい」と思える運動の心地よさが味わえれば、運動に向かう気持ちは高まり、自然と動き出したり、できるようになるために思考を巡らせたりしながら、さらなる動ける身体をもつことができるであろう。そして、その気もちや感覚は残り、生涯を通じて運動に親しみ、その結果として体力が向上し、人とのかかわりが深まるはずである。

これらをふまえながら、思考力・判断力・表現力についての11年間のつながりを下のよう
に考え、取り組んだ。

初等部前期	遊びやたくさんの運動を経験し、自分の「やってみたい」という思いをもち、表すことができる。
初等部後期	これまでの運動経験を生かし、自分の課題を見つけ、運動のポイントを考え、運動することができる。
中等期	既習の基本的な知識・技能をもとに自分や他者の課題を発見し、適切な解決方法を選択し、考え、実践することができる。

11年間の学びの中で、子どもたちに運動の心地よさを味わわせることで「もっとできるようになりたい」という意欲につなげてきている。また、「できそうだ」という感覚をもたせるために、子どもたちの実態をとらえながら、様々な運動感覚を体感させてきた。その上で、系統的な運動の視点を設けながら、学び合いの場面を設定することで、意欲をもって取り組み、課題を見つけるためにかかわり合おうとする子どもたちの姿が見られるようになってきた。

(2) 思考力・判断力・表現力を育てる学び合い

ここで、小学5年のハーフコートバスケットボールの実践を紹介する。この単元では、シュートにいくためのよい動きを見つけるために、動きをイメージ化していった。その中で、教師のはたらきかけによって、次のような学び合いがあった。

T1 : グループで話し合ったことを意識できた？

児童 C : 広がるとパスがもらえた。

児童 D : 広がってジグザグにパスをし合うとシュートにつながりやすかった。

～コートをもつ8つの部屋に分けたコート図を見せる～

T2 : このシュートにつながった軌跡図とつながらなかった軌跡図を見て気がつくことは？

児童 E : シュートにいったのは、部屋をたくさん使っている。

児童 F : たくさん部屋を使ったら、シュートにいけそう。

児童 G : コート全体を使っている。

児童 H : 端の部屋を多く使っている。

児童 I : シュートにいった軌跡図は、あまり部屋を使っていない。

T3 : いろいろな部屋を使うとよさそうだね。自分たちのはどうなっているか確かめてみよう

～透明な「コートの部屋カード」を配り、ゲームの軌跡図にカードを重ねて考える～

児童 J : 片方の部屋しか使っていないことが分かった。

児童 K : 真ん中の部屋ばかりで、両サイドの部屋を使っていなかった。

児童 L: 片方の部屋に寄っていた。部屋の大部分を使うと得点につながっていると分かった。
特に、ゴールに近い下半分を使うとよく点が入る。

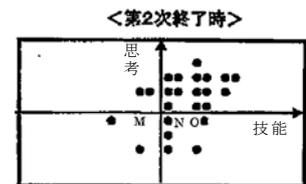
T4 : 下半分の部屋を使うと点が入りやすそうだね。

コート部屋の提案するはたらきかけにより、子どもたちはコートを広く使うことよき、敵や味方がいないところへ動くことよきがわかっていった。子どもたちが学びを深める機をとらえて、「コート部屋」を示したことでさらに学び合いが活発になり、パスやシュートが多くなり、積極的にシュートに行く場面が見られた。このように学び合いの場面を意図的に設定することにより、子どもたちの思考や判断が促され、次の「やってみたい」へとつながっている。さらに、動きを見る子どもたちの目が育ち、それを言葉や動作で伝える力がのびていった。

(3) 思考力・判断力・表現力の評価

運動の心地よさを味わわせながら、思考・判断したことを表現する力をのばしていく中で、子どもたちのふりかえりや子どもの動きを見て、一人一人の課題や考えを2軸に表し、とらえていった(右図)。それをもとに、一人一人がのびていくためには、次の時間にどのようなはたらきかけが必要であるのかを考え、取り組むことができた。また、個々の考えを、ねらいにそって全体へ提案していくことで、よい動きをみつけようとする姿や、仲間の考えから自分の考えを広げ、次の動きにいかそうとする姿も表れた。発言やふりかえりから、個々の子どもの変容や姿や新たな疑問などもとらえることができた。

このように個々の子どもの1時間ごとの様子を教師がとらえておくことで、単元構成の中での意図的なはたらきかけをして、学びをつなげていくことができた。子どもをとらえ、はたらきかけることは、単元を進めていくうえで大変重要であるということが分かった。

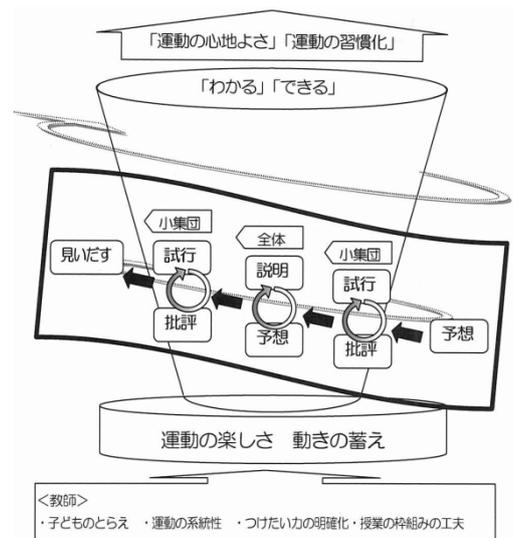


<第2次終了時>
 児童M: 空いているスペースに行くと、敵のいないところに行くとパスがもらえて、シュートにいった。
 児童N: 「空いているところに動く」をやってみた。結構空いているところを見つけることができたので、たくさんパスがもらえるようになった。
 児童O: 空いているところに行くとよくパスがもらえた。周りをよく見てフリーのがいたらパスをすると、(その人が)シュートにいった。

3 本年度の研究

(1) 学んだことをいかしている子どもの姿

子どもたちは、学習の中で、過去の運動経験を生かすことで次の学びへとつなげている。体育・保健体育科における、子どもたちのいかす姿としては、右図のように高まっていく。初等部前期から中等部まで、1時間の授業は、予想(前時のふりかえりをもとに)→1回目の試行・批評(小集団)→説明・予想(試行・批評をもとに学級全体で)→2回目の試行・批評(説明・予想をもとに)→見いだす(次の課題へ)という流れで行うことが多い。このような学びの中で、特に小集団(ペアやグループ)での試行と批評が大切になる。それは、小集団において、次のような学び合う場面が考えられるからである。



○出会った運動において、自分の考えを確かめるために試しに動いて、調整しながらよりよいものにしていく。(試行)

○動きを見合うことで、互いの考えについて評価(アドバイス)し合い、見えにくかった自分やチームの動きを視覚化していくことで、よりよいものを求めている。(批評)

体育・保健体育では自分では見ることの難しい自分（チーム）自身の動きを視覚化していくことで、自分ができていること、できていないこと、また、そこから生まれる課題をもとに、思考力・判断力・表現力を育成し、技能を向上させていくことが大切になる。このようにして、自分に蓄えられていった経験を、さらに積み重ねていきながら、必要に応じて以前の単元や本単元で蓄えたものを引き出し、いかしていくことができる。

そのような中で、初等部前期では、環境構成を工夫し、運動へむかう意欲を高め、初等部後期では、「やってみたい」という気持ちを大切にした運動感覚づくりをしていき、中等部では課題発見力と課題解決力をのばし、「できる」を保障する。これらを基盤とし、子どもたちが運動の楽しさを味わいながら学び合い、それぞれの発達に応じて試行・批評の場面をより深めていけるように、単元の構想をしていきたい。

(2) 学んだことをいかすための構想

体育・保健体育の学習では、自分の動きを見ることが難しいため、自分の動きをイメージすることも難しい。そこで、小集団で試行や批評を繰り返す必要がある。自分の動きや課題をイメージした上で、より多くの人の考えにふれさせ（説明・予想）、これまでの自分自身の思いや考え、知識と比較することで思考をゆさぶったり、新しい考えを実感できたりするような直接的な教師のはたらきかけも必要である。

さらに、練習時間においては、個に応じた教師のはたらきかけがグループでの学び合いを深めることや、技能の習得において重要となってくる。そこで、子どもが伝えたいことをより明確にし、全体が共有できるように考えを掘り下げることが必要である。また、動きを視覚化し、より学びを深めていくことができるよう、子どもたちに運動場面を提案することも必要である。そして、子どもたちが主体的に活動をすることができるよう、つけたい力をもとにふりかえりを工夫し、子どもの思いや考えを全体に表現し、共有できる場を設定していくことで、次に自分たちが学びたいことを考えることができるようにしていく。

また、豊かな表現を生み出すためには、過去にどれだけたくさんの運動を経験してきたかが重要になってくる。したがって、動きの系統性を意識し、子どもたちの思考を円滑に引き出すための工夫も必要である。系統性を意識することで、新たな運動場面において、以前思考し、判断したことを思い出していかしたり、運動感覚を呼び起こしていかしたりしながら運動をすることができる。そこから、さらに上達していくためにはどのようにしたらよいのか、新たな課題をみつけ合うことで思考力・判断力・表現力が育成されていく。発達段階に応じた運動との出会わせ方や、身につけさせたい力を明確にすることなど、系統性を大切にしながら確実な力につなげていきたい。

4 成果と課題

発達段階をとらえ、学び合いを深めるために自分たちの動きを視覚化することに取り組んだ。体育の学習の中での動きは瞬間的に変化していく。その動きの変化を視覚化することで、子どもたちは課題に気づき、それを解決しようとかかわり合う中で、話し合いの質も高まり、技能の向上につながった。

しかし、思考・判断・表現したことが十分に技能面につながったのかどうかという課題が残る。「運動の心地よさ」を味わうことで、さらに運動し、学び合っていくことができる。思考・判断・表現したことと技能とが相互に関わり合うための教師のはたらきかけについて今後の課題とする。

(文責 小草 康弘)